2Fp-2
カフェイン飲料摂取習慣形成に影響する要因分析の試み
○壇田香子 （聖徳女短大）
（目的）カフェイン飲料摂取習慣は青年期に形成される習慣の１つと考
えられるが、カフェインに関してはその依存性の存否に関して議論されたこと
もあり、摂取習慣がどのような要因の影響を受けて確立するかは興味深い。本
調査ではカフェイン代謝に関与する酵素の１つであるN-アセチル転移酵素、および
冠動脈疾患の危険因子であるといわれるタイプA行動特性に関して、カフェイン飲料摂取習慣と
の関連を調べた。
（方法）秋田県在住の１８－２０歳女子の血液を用いて、ＰＣＲ法により、N-アセチル転移酵素の遺
伝子１－４についてその存在を確認した。この結果、遺伝子型を分類し、代謝型を推定した。また、
アンケートにより、カフェイン飲料の摂取頻度、摂取目的、摂取するカフェイン飲料の種類などを
調査した。また、タイプA行動特性に関わればKGG式質問紙法により、個々の傾向を数値化した。
これらから、カフェイン飲料の摂取頻度により、集団を３群に分け、それぞれの集団のN-アセチル転
移酵素代謝型出現頻度およびタイプA行動特性度を比較した。
（結果）現在のところ、６６名の結果が得られている。カフェイン飲料を每日摂取する集団（１群）、
週２回以上摂取する集団（２群）、週２回以下摂取する集団（３群）に分けたところ、それぞれの人数は
１名、３名、１名であり、毎日摂取することの確実とみなせば、２2.7％にカフェ
イン摂取習慣がある。それぞれの群におけるN-アセチル転移酵素代謝型は１群で連い：7名、中間：
6名、遠い：2名、2群で連い：１７名、中間：１５名、遠い：１名、３群で連い：8名、中間：6名、
遠い：4名であり、3群で代謝型の遠い者の出現頻度が高い傾向はあるが、明確な出現頻度の差は認め
られなかった。また、タイプA行動特性に関しても、１群に高いタイプA傾向性は認められなかった。

2Fp-3
高校生のアレルギー性疾患に関する実態調査
○細口 壽* 武副礼子** 黒川由美*3 平井和子*3
（*大阪女子学園短期大学　**大阪府立看護大学療部短期大学*3大阪市大）
【目的】近年アレルギー性疾患の増加が著しく、その要因として食生活や環境因子など
が挙げられている。そこで本研究では、高校生のアレルギー性疾患発症の実態を調べ、発
生要因や健康に関連する意識について検討した。
【方法】大阪府内の高校生461人（男子177人、女子284人）を対象に、平成4年1月に
アレルギー性疾患の最近1年間における発症経験と健康に関連する生活習慣への意識につ
いてアンケート調査を行った。
【結果】アレルギー性症状経験者は男子67.6％、女子67.4％であった。発症時期は男女
ともに不規則が約々49.1％、46.3％と最も多く、次に季節性、週年性の順であった。男子
ではアレルギー性鼻炎が38.4％で最も多く、次にアトピー性皮膚炎16.5％で、アレルギー
性結膜炎と花粉症が各々18.5％であった。女子はアレルギー性鼻炎が30.3％と最も多く、
次にアトピー性皮膚炎18.6％、蕁麻疹17.1％、花粉症11.7％の順で、性差がみられた。
アレルギー性細胞が各々原因に対して“家のほこりやダニ”と答えた割合は58.4％と最
も多く、次に“花粉”49.8％、“特定の食物”21.5％、“ペット”（14.6％）、“精神的
環境”（11.4％）の順であった。アレルギー症状を感覚の対応としては、66.7％が“無
処置”で最も多く、“受診”37.9％、“服薬”24.7％の順であった。アレルギー性疾患経
験者の男子では葉物の摂取頻度が高く、女子では卵、肉類の摂取頻度が高かった。アレル
ギー症状経験者の男子では“排便が週に3回以下”が8.1％、“不規則”が15.1％で、ア
レルギー症状の無経験者（各々11.1％と6.8％）よりも多い傾向がみられた。